

科学力増進分科会の活動について

須藤 靖

4月14日の科学力増進分科会で議論すべき内容について、時間短縮のためにあらかじめ説明しておいた方が良いと思われる事項について以下にまとめました。お忙しいところ恐縮ですが、委員の皆様にはどうか事前に目を通して頂いた上で、当日の分科会で議論をお願いします。

1) 科学力増進分科会のミッション

実は必ずしも明確に定義されているわけではないように思います。私自身は、第22期から委員となっていますが、その時から科学力増進分科会はすでにある程度既定路線となっている活動を踏襲しているだけで、新機軸を打ち立てていないという批判があったようです。当時の委員長であった毛利衛さんのもとで、何度か今後の活動についての議論をしたのですが、結局中途半端な結果だったと言わざるを得ません。その後、私が委員長となったのですが、やはり委員の皆さんのお忙しさもあり、新たな試みは第23期からということになりました。

ところが、第23期になった時点で、我々には事前の説明もないまま当時の広報分科会と科学力増進分科会が合体され、広報・科学力増進分科会に再編されました。これは、学術会議の広報活動が弱いためにそれを強化するには、二つの分科会が協力するべきだろうという判断だったのでしょう。

しかし、広報分科会は、毎月発行される「学術の動向」誌の企画と編集という大変な仕事を抱えており、年に4回（2回は学術会議総会時）開催される分科会では主としてその話題だけで時間を終えてしまう結果になりました。

そのために、委員長であった小松先生と、副委員長であった私が相談して、広報分科会と科学力増進分科会に再び分離すべきであると執行部にお願いし、今回から再びその体制となったものです。

2) 今までの活動

科学力増進分科会が定期的に行ってきたものは、以下の通りです。

2a) サイエンスカフェ

文科省のラウンジを用いて、奇数月の第3あるいは4金曜日の夕方に開催。講師を招いて、20人程度の参加者（ウェブで事前に募集）の前で話をし、それに基づいた双方向の対話を行う。

2b) サイエンスアゴラ

11月の上旬の週末に、お台場で開催される JST 主催の科学の祭典。子供から大人までの広い層を対象とする。学術会議として、毎年2、3のシンポジウムを立案している。

2c) 女子中高生夏の学校

国立女性教育会館企画ではあるが、科学力増進分科会と男女参画分科会が共催として10年以上継続。毎年2名以上の委員が合宿型の会議に参加し挨拶と講演などを行う。

2d) 高校理科教育検討小委員会

本分科会の下につくられた小委員会（つまり、旅費も会議費も何もない）で、高校理科教育のありかたを議論するもの。2016年2月8日に「これからの高校理科教育のあり方」という提言を公表した。

3) 今後の活動について

最初にまとめておくと、これからは以下の活動を行う予定です。

- 奇数月の第3あるいは4金曜日の夕方に行う文科省との共催サイエンスカフェの実施（委員の皆さんに順番で講師の推薦と当日の挨拶をお願いする。すでに2016年11月までの担当は決定済み）
- 11月のサイエンスアゴラ（学術会議からの企画を2、3提案し、実行する。他の分科会に積極的に働きかけて企画などをしてもらうのでも良い）
- 日本学術会議全国縦断サイエンスカフェ（5月18日に私が試行する予定なので、それをもとに他の会員の方々の協力を得て、毎年2、3回は開催したいと希望している）
- 科学力増進分科会による学術会議主催シンポジウムを年に一回（今年は、6月に高校理科教育をテーマとして開催したい）

これらに関して以下に詳しい説明をします。もちろん、これに限らず新しい企画を積極的に提案して頂くことを歓迎致します。

3a) 文科省とのサイエンスカフェ共催

10年以上前から、当時あまり知られていなかったサイエンスカフェを日本でも始め、現在のように定着させたのは、毛利衛さんを始めとする当時の学術会議の会員の方々のご尽力の結果です。ただし、すでに膨大な数のサイエンスカフェが行われるようになってきた現在では、毎回20人程度を集めて行うサイエンスカフェを科学力増進分科会の中心活動だとするのはやや疑問です。

私は第22期の分科会委員になった時から、その問題を訴えて、毎月行っていた文科省でのサイエンスカフェを隔月にし、その代わり、年に一度より大きなシンポジウムを開催して学術会議の活動を広く世間に伝えることと、サイエンスカフェがほとんど開催されていない地方に進出することを提案してきました（事務局が作成してくれた日本でのサイエンスカフェ開催状況マップを参照してください）。その結果として、サイエンスカフェが隔月になったのは良いとしても、それ以外の活動は定着しないまま現在に至っています。

私は、故郷の高知で開催された物理学会での市民講演会の翌日の2013年9月13日に、高知市と協力してサイエンスカフェを試行しました。多くの方々が集まってくださり成功だったと思うのですが、結局それが一回限りに終わっています。これはぜひとも継続的に全国展開する活動にしたいと思います。ただし、学術会議は予算がないので、学術会議の会員や連携会員の皆さんが学会で地方に行かれた際、あるいはそれぞれの支部の方々をお願いするしかありません(以下参照)。

3b) サイエンスカフェ開催の内規改訂

科学力増進分科会が直接担当しているのは、文科省との共催のものだけなのですが、実は学術会議主催と銘打ったサイエンスカフェは他にもあります。サイエンスカフェを定着させたいという当初の目的のために、サイエンスカフェは会員と連携会員が提案すれば、幹事会を経ることなく日本学術会議主催を名乗ることができることになっています。これはあくまで例外規定なのですが、実際、同じ団体とずっと継続している件もあり、それが良いことなのか悪いことなのか微妙です。

例えば、もしも私が自分の関係する研究室や研究科の主催するサイエンスカフェを定期的に行う場合、私が学術会議サイエンスカフェとしたい、と申

請すれば自動的に承認されるはずですが、また、私が特定の企業とタイアップしてサイエンスカフェをすることになったときも同じです。

学術会議ではサイエンスカフェの講師に対する情報提供もしているのですが、ある団体から講師を本分科会から推薦し、さらに学術会議主催としてほしいとの依頼があったこともあります。もちろんお断りしたのですが、実は他にそれに類似したサイエンスカフェを行っている会員や連携会員がいらっしゃる場合には、公正性の観点から問題が生じかねない事例もあり得ます。

そこで、今後は、サイエンスカフェ開催について、科学力増進分科会における承認を得る必要があるとの規定改正をしたいと考えています。この件については、今回の分科会で議論して承認して頂く必要があります。

その後、幹事会での議論を経て、現在の届け出の形になりました。

3c) サイエンスアゴラ

これはかなり膨大な祭典であり、学術会議の企画は正直全体の中で完全に埋没しています。参加者が少なくとも学術会議らしいシンポであれば良いとの考え方もありますが、一方で、折角の機会なのでできるだけ多くの方々に学術会議の活動を知ってもらいたいというのもまた確かです。

また、本分科会委員である渡辺美代子先生自身が JST 側でサイエンスアゴラを改革する立場として携わっていらっしゃいますし、私も昨年から委員を拝命しています。このような主催者側の今後の方針と情報を共有しながら、本分科会からよりよい企画をだし、またそれを学術会議の他の分科会にも呼びかけて行きたいと思います。

3d) 女子中高生夏の学校

10年以上共催してきたのですが、担当される委員の負担が大きく、しかも同じ団体にだけいつまでも続けるのではなくそろそろ区切りを付けるべきだと考えています。これは上述のサイエンスカフェと同じく、定期的に新たな活動を始めるために、すでにある程度定着したものはそちらにお任せするという一貫した方針です。この件については国立女性教育会館からすでに何度も問い合わせがあり、前委員長であった小松先生と相談の上、今後継続して共催する可能性は低い旨お伝えしていますが、正式には今回の分科会で議論し決定すべき事項です。

その後科学力増進分科会としての関与は取りやめております。

3e) 日本学術会議全国縦断サイエンスカフェ

5月中旬に高知工科大学でセミナーを頼まれたので、ついでにサイエンスカフェを開催する可能性を打診したところ、ちょうど高知工科大学で定期的

にサイエンスカフェを開催する企画を考えていたところだとことでした。したがって、それとタイアップする形で学術会議のサイエンスカフェ全国展開の第一回としたいと考えています（5月18日を予定）。この件も、今回の分科会で皆様からのご承認を頂きたい案件です。

もしこのようなやり方に賛同して頂けるのであれば、学術会議からの支出はなしに実行が可能です（今回の旅費と滞在費は高知工科大学から支出してもらえます）。これは、地方で学会が開催される場合も同様ですが、学会の場合には担当者がすでに疲弊している可能性があるのも、集中講義やセミナーなどで地方の研究機関を訪問する際の方が現実的かもしれません。できれば今回の試行を具体的な例として提示して、広く会員・連携会員の方々に学術会議の活動を含めて生で対話して頂ける機会をつくってもらいたいと考えています。

3f) これからの高校理科教育に関するシンポジウム

2d)で書いたように、本分科会の下に設置されている高校理科教育検討小委員会は、今期も継続します。特に、今回まとめた提言のフォローアップは重要な仕事です。そこで、今年の本分科会のシンポジウムとして以下を提案します。今回の分科会で承認してもらえれば、5月の幹事会で正式に承認される予定です。学術会議主催シンポジウムにしてもらっても旅費等がでるかどうかわかりませんが、面倒なので私の研究室の運営費等で開催したいと考えています。

以上

日本学術会議全国縦断サイエンスカフェ

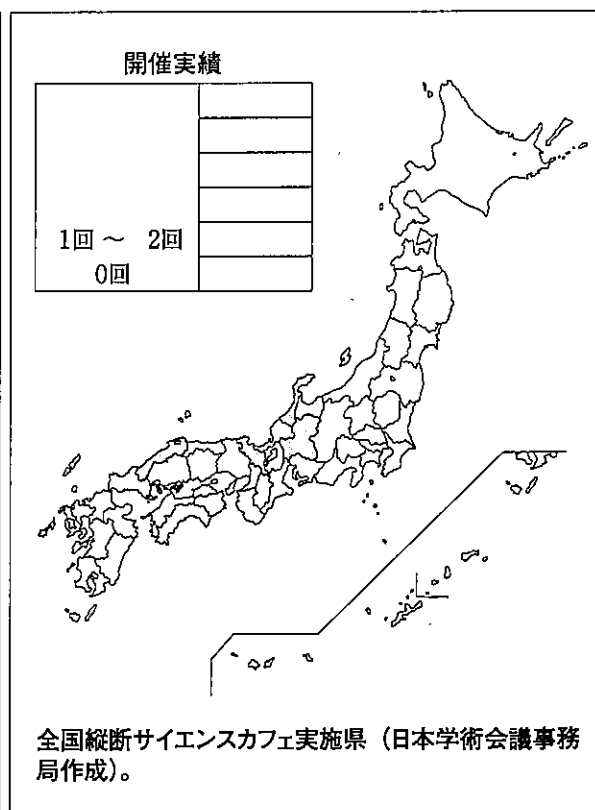
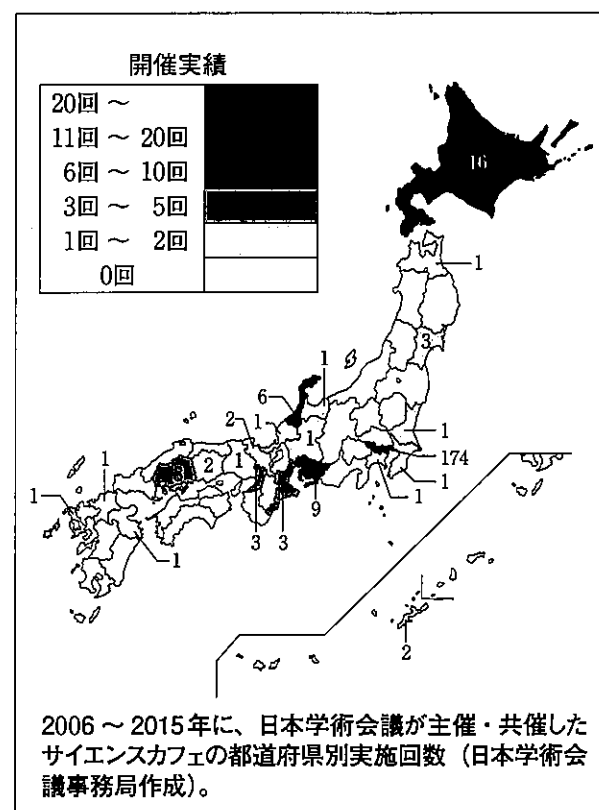
イギリスやフランスから始まったサイエンスカフェは、日本でも活発に行われるようになっていますが、その普及には日本学術会議が文部科学省と共催で定期的に行って来たサイエンスカフェが大きな役割を果たしてきました。

一方で、それらは大都市圏、とりわけ東京に過度に集中しています。例えば、以下の図に示された2006年以降に日本学術会議が関与したサイエンスカフェの分布をご覧ください。これをどう解決するか、第23期の科学力増進分科会で議論を重ねた結果、2016年より全国縦断サ

イエンスカフェの企画を開始しました。

と言っても、ご存知のように日本学術会議には、サイエンスカフェを地方で開催するための予算はほぼ皆無です。そこで考えたのが、学術会議会員、および連携会員の方々が、他の用務で全国各地に出張する際に、自治体や学会、大学、中学・高校などと協力してサイエンスカフェを共催していただく方式です。

その第1回は、高知市教育委員会と高知工科大学に共催していただき、2016年5月18日に高知市で行いました。第2回は2016年12月4日に



香川大学との共催で行いました。さらに日本農芸化学会と石川県立大学との共催で、2017年2月26日に金沢市で第3回が行われました。過去の2回とは異なり、大学の施設ではなく、市内のカフェで開催したのが特徴です。さらに、5月20日に日本科学史学会普及委員会との共催として京都で第4回が、6月22日に長野県環境保全研究所との共催として第5回が、そして7月31日には日本学術会議第一部夏季部会に合わせて島根県立出雲高校で第6回が開催されました。

第1回の様子は、磯部高知工科大学学長が『学術の動向』2016年7月号で報告してくださっています。本号をはじめとして、サイエンスカフェの報告は順次『学術の動向』で紹介していただける予定です。

全国縦断サイエンスカフェは、日本学術会議の会員あるいは連携会員の方が挨拶や講演などを行っていただければ、申請可能です。すでに開かれた例をご覧ください。様々な機会をうまく利用してサイエンスカフェを全国展開することが可能です。その結果は、日本学術会議の知名度を地方にまで高める役にも立つものと期待しています。詳しくはホームページを参照の上、申請用紙に必要事項を記入して、事務局までメールでお送りください。

ちなみに、今までの開催状況は、<<http://www.scj.go.jp/ja/event/cfmap.html>>で確認できるようになっています。すべての都道府県で日本学術会議のサイエンスカフェが開催される日が来ることを心待ちにしています。

須藤 靖

（第23期日本学術会議科学と社会委員会・科学力増進分科会委員長）

第1回

開催日 2016年5月18日（水）

場 所 高知工科大学

共 催 高知市教育委員会、高知工科大学

テーマ この空のかなた：第二の地球、ダークエネルギー、重力波

話題提供者 須藤 靖（東京大学大学院教授、連携会員）

報 告 『学術の動向』2016年7月号参照

第2回

開催日 2016年12月4日（日）

場 所 香川大学

共 催 香川大学

テーマ 技術と民主主義

話題提供者 今田高俊（東京工業大名誉教授、連携会員）、柴田徳思（榊千代田テクノル、東京大名誉教授、連携会員）

報 告 2016年12月4日、香川県高松市内の香川大学幸町キャンパス研究交流棟5階・研究者交流スペースにおいて、「日本学術会議全国縦断サイエンスカフェ」の第2回が開催された。第1回が開かれた高知県とともに香川県もサイエンスカフェの空白県であった。

開催にあたっては、香川大学大学教育基盤センター、同博物館、同教育学部による共催という形を取り、同大学の市民・学生・教員向けの公開講座「アドバンスト・セミナー」としても位置付けていただき、広報、会場および運営、予算面での協力・支援を得ることができた。また、学校関係者および生徒の参加のしやすさを考えて香川県教育委員会および高松市教育委員会の後援を得た。

当日のテーマは、『核廃棄物処分の科学・技

術と民主主義』で、話題提供者は、今田高俊東京大名教授（連携会員）および柴田徳思東京大学名誉教授（現（株）千代田テクノ大洗研究所・連携会員）の2名で、司会進行は笠潤平（香川大学・連携会員）がつとめた。

参加者数は中学生4名を始めとし、大学生・院生、中学校教員、大学教員、マスコミ関係者、その他一般市民などからなる34名であった。地域のマスコミ各社への広報も行ったが、それよりも大学の広報ページで知った方、われわれが知らないところで好意的に紹介して下さった市民団体のネットワークを通じて知った方が多かったようだった。

当日は、香川大学の藤井宏史副学長の挨拶のあと、今田高俊氏からの30分程度の話題提供と柴田徳思氏からの補足コメントがあり、続いて話題提供者と参加者の間の自由な質疑応答や意見交換を中心とした茶話を3時間にわたって行った。

今田氏の話題提供は、パワーポイント資料を示しながら、今田氏らが中心的にまとめた2012年9月の原子力委員会への『回答』と2015年4月の『高レベル放射性廃棄物の処分に関する政策提言』の趣旨を簡潔かつやさしく報告するものであった。

議論の話題は、原子力発電によって生まれる核廃棄物の処分問題の現状、日本学術会議の提言の提起する「暫定保存」と「総量管理」の意味などをはじめ、関連する幅広い話題について、多岐にわたったが、専門家と市民が双方向的に議論するという機会を設けるというわれわれの意図通りの会となったと感じている。実際、事後に書いていただいた参加者アンケート結果を見る限り、催し全体は大変好評であった。

しかし一方で、テーマに対する参加者の関心

は非常に高かったにも関わらず、日本学術会議の原子力委員会への2012年の『回答』や2015年の『提言』を今回はじめて知ったという方が多数を占めていることがわかった。筆者の私見では、現在および将来の国民にとって疑いなく重要で、かつ、東電の福島第一原発の事故以来、国民の重大な関心事でもあるこの問題において、日本学術会議が議論を尽くしてまとめた提案がこれほど知られていないというのは、非常に残念なことであるように思われた。とくに、「原子力政策に関する大局の方針についての国民的合意が欠如したまま、最終処分地選定という個別的な問題が先行して扱われて」きたことを確認し、「市民参加による議論の場の設置を含む多段階の合意形成の手続きを踏む必要性があること」を指摘した『回答』の基本的な立場は、多くの市民にとって議論の重要な出発点となりうることを考えるとなおさら残念に思われる。

この問題は一例にすぎないが、現代において、科学・技術と社会が関わる諸問題に関して、科学者と市民をつなぐ活動は非常に重要であり、サイエンスカフェがその中で果たすべき役割は大きいように思われる。なぜなら、サイエンスカフェは一回一回の規模や影響力は小さくとも、科学者と市民をつなぐ活動が双方向的な精神を持ち続けるための原点とも象徴ともなりうるからである。

笠 潤平

（香川大学教育学部教授、連携会員）

第3回

開催日 2017年2月26日（日）

場 所 カフェ ラモード

共 催 日本農芸化学会

後 援 石川県立大学、北國新聞社

テーマ 科学でよみとく食べ物の秘密～みのまわりのバイオテクノロジー～

話題提供者 中谷内 修、小柳 喬、本多裕司、栗原 新（石川県立大学）

報 告 日本学術会議の農芸化学分科会は、これまで日本農芸化学会との共催により各地でサイエンスカフェを開催してきた。日本農芸化学会のサイエンスカフェは2006年10月の第1回開催から数えて、2017年の3月には100回目を迎え、2017年10月13日に香川県松山市で開催される第104回も日本学術会議との共催の予定である（http://www.jsbba.or.jp/science_edu/sci_cafe/）。

このように農芸化学サイエンスカフェの共催は、日本学術会議農芸化学分科会の主要な活動のひとつとなっている。

2017年2月26日に石川県金沢市で開催されたサイエンスカフェは、日本学術会議全国縦断サイエンスカフェの第3回として行われた。石川県立大学と北國新聞社の後援を受け、金沢市繁華街の中心である香林坊のカフェで飲み物とお菓子を楽しみながらの文字通りのサイエンスカフェであった。テーマは「科学でよみとく食べ物の秘密～みのまわりのバイオテクノロジー～」で、コーディネーターは石川県立大学の南博道准教授、講師は石川県立大学の若手研究者4人が高校生を対象に話をした。

テーマの内容 私たちの身の回りには、様々な食べ物があふれている。じつは、そのようなありふれた食べ物にも、バイオテクノロジーが利用されている。大学で研究されていることは難しくわかりにくいと思いがちだが、私たちの生活にとっても身近なものである。このサイエンスカフェでは、バイオテクノロジーと食べ物の

関係、さらには最近話題になっている腸内細菌と健康との関係について、科学的な視点から話をした。

演題1)「植物のバイオテクノロジー」

中谷内 修 氏

サツマイモを中心に、植物の遺伝子組換え技術の基礎とその応用について紹介。

演題2)「発酵食品にひそむ微生物たちのチカラ」

小柳 喬 氏

味噌、醤油、納豆、ヨーグルトなどの発酵食品の中で、微生物達はどのように活躍しているのか。彼らの見事な役割分担によって醸し出される素晴らしい味わいの秘密を紹介。

演題3)「加賀レンコンの魅力を澱粉から考えてみた」本多裕司氏

レンコンの一般的なお話と、加賀レンコンにたくさん含まれている澱粉の性質に関して紹介。

演題4)「腸内細菌とヒトとの共生」栗原 新 氏

近年の腸内細菌研究流行のきっかけ、ヒト健康と腸内細菌との関連についての最新研究を紹介。

「定員20名（先着）生物と化学に興味がある高校生（保護者の方も参加可能）」として募集したが、最終的には高校生が26名、高校教員2名、保護者等3名の合計31名が参加し盛況となった。「醸しの働き」在します国、加賀・能登との言葉があるように、石川県は「いしる」や「かぶらずし」に代表される豊かな発酵食品の宝庫である。また、サツマイモの五郎島金時や加賀レンコンは、加賀野菜として独自のブランドを確立している。このように高校生の身近な食べ物から最新の科学的知見へと展開し、最後は腸内細菌と健康までの話題に、高校生からの質問も活発で大変

充実した時間であった。

西澤直子

(石川県立大学生物資源工学研究所特任教授、
連携会員)

第4回

開催日 2017年5月20日(土)

場所 キャンパスプラザ京都

共催 日本科学史学会普及委員会

後援 京都市教育委員会

テーマ ガリレオ『科学者』の誕生—

話題提供者 伊藤和行(京都大学大学院文学研究科教授)

報告 日本学術会議「全国縦断サイエンスカフェ」が京都で開催された。今回のサイエンスカフェは「科学技術史」の話題としてガリレオ・ガリレイ(イタリア、1564-1642)を取り上げ、歴史を通して現代の「科学者」を考える内容であった。話題提供者はガリレオ研究で著名な京都大学大学院文学研究科・伊藤和行教授で、2017年5月20日に京都駅近くのキャンパスプラザ京都の講習室で行われた。

京都開催の取組み 日本学術会議・科学と社会委員会の科学力増進分科会(須藤靖委員長)は新方針に全国縦断サイエンスカフェを掲げた。分科会委員の兵藤友博は京都に在住ということもあり、京都での開催の可能性を探っていた。兵藤と今次共同企画者の小長谷大介が所属する日本科学史学会は、一般向け講演会「科学史学校」を東京で開催しているが、科学史・技術史のいっそうの普及という観点から他地域での開催を検討してきた。こうした経緯から、日本学術会議科学力増進分科会と日本科学史学会普及委員会のジョイント企画で、京都開催の全国縦断サイエンスカフェ「科学技術史」を行うに

至った。広報としては学術会議HPや科学史学会HP、理科教育関係のサイト等に依頼し告知した。また、京都周辺地域の若い世代へのサイエンスカフェの周知のために京都市教育委員会の後援企画とした。サイエンスカフェの準備や当日の進行は、日本学術会議・科学力増進分科会委員の兵藤が会場の確保や開催の趣旨説明などを担い、日本科学史学会・普及委員会委嘱委員の小長谷が話題提供者の推薦、司会進行などを担った。

テーマの内容 伊藤教授の話題提供では、19世紀における「科学」の制度的成立、それに伴う「科学者」の登場を概観した後、ガリレオは17世紀に活躍したが、現代に近い「科学者」とみなすことができるのではないかと、というテーマを述べて、ガリレオの話題に入った。話題のなかでは、ガリレオの名声を高めた望遠鏡による月の観測、木星の衛星、金星の満ち欠け、太陽黒点の研究などをめぐるイエズス会士のクリストフ・シャイナー(1573-1650)との論争が取り上げられ、研究成果の検証や先取権、パトロンなどが絡む、当時の時代状況を彷彿とさせるガリレオの科学活動が紹介された。話題を通して、自然現象における数量的法則性の探究、実験や観測による確証といった近代科学の方法を最初に提示したとして知られるガリレオだが、



現代の科学者活動に通じる特許や先取権、研究活動を支える競争的資金の獲得などに深く関係する「科学者」としての側面を持っていたことが紹介され、歴史上の科学者を扱いながらも科学技術にかかる現代的問題を考えることができた。

参加者のアンケートから 当日、参加者に本企画に関するアンケートに答えてもらった。回答結果によれば、参加者の多くは、ホームページや、知人等による情報提供で企画を知り、テーマへの関心、サイエンスカフェそのものへの興味から参加したとのこと。内容については、「貴重な話を楽しく聴けた」、「もう少し時間があればいろいろな方向へ話が広がりそうだ」といったコメントをはじめ、「先取権という欲望が科学を発展させるのか」という生々しい科学活動の現実に切り込むコメント、「普段の大学(経済・経営系)の授業とは異なった話題で興味深い」といった文系大学生からの感想も寄せられ、総じて「満足」だったとの回答であった。

サイエンスカフェということで、メディアや書籍、教育施設を通して科学・技術の情報に触れる普段の様式とは異なり、話題提供者と参加者との交流を通じて話題も柔軟に展開され、興味に応じて適時質問しながらサイエンスに触れる「楽しい」集まりとなった。今後取り上げて欲しい話題には、「宗教と科学の関係」、「京都の科学者シリーズ」などが挙げられ、京都開催ならではのサイエンスカフェを試みるヒントとなった。全国縦断サイエンスカフェ・京都編はいろいろな収穫を得る機会となった。

兵藤友博

(立命館大学経営学部教授、第一部会員)

小長谷大介

(日本科学史学会会員(普及委員会))

第5回

開催日 2017年6月22日(木)

場所 ステーションビルMIDORI長野

共催 長野県環境保全研究所

テーマ セミから考える気候の変化

話題提供者 沼田英治(京都大学大学院理学研究科教授、連携会員)

第6回

開催日 2017年7月31日(月)

場所 島根県立出雲高校

共催 島根県立出雲高校、島根大学

テーマ 18歳選挙権の時代に私たちは何を考え、どう行動するか in 出雲—センター試験の廃止と2020年の世界を見すえて—

話題提供者 小玉重夫(東京大学大学院教育学研究科教授、第一部会員)

報告 今回のサイエンスカフェは、日本学術会議第一部の夏季部会を島根県松江市で開催する機会を利用して、同じ県内の出雲高校で実施することになった。同高校は、スーパーサイエンス・ハイスクールおよびスーパーグローバル・ハイスクールに指定されており、科学的リテラシーの育成や海外研修をはじめとして多彩な取り組みをおこなっている。カフェには、2・3年生を中心に12名が参加した。

小玉先生のお話は、18歳選挙権の歴史的な背景から始まった。大学紛争が全国に広がった1969年にされた文部省通達は、「国家・社会としては未成年者が政治的行動を行なうことを期待していないし、むしろ行わないよう要請している」と述べていたが、それから半世紀ほどたった2015年の文科省通知では、「高等学校等の生徒が、国家・社会の形成に主体的に参画し

ていくことがより一層期待される」となっており、考え方は180度転換したこと、そしてこの間に衆議院議員選挙の投票率はわずかな例外を除いて低下し、とりわけ20歳代の投票率ももっとも顕著な低下を示したことが説明された。ここで、投票率が高まったわずかな例外は何の時だったか、という質問に対して、ほぼ正しい回答が出されたこと（郵政民営化と自民党から民主党への政権交代期）は印象に残った。

このような選挙の動向から、争点が明確であれば投票率は上がり、選挙の結果が政治の方向性を変えるきっかけになっていることがわかり、したがって「政治的・社会的に対立する問題を取り上げ、関心を持たせたり、判断力を養成するような教育」が求められている、と説明は続いた。そのうえで、過去と未来の間に生きている私たちは、未来を選択したり、あるいはこれを変えることができるのではないかという問いかけがなされた。この流れの中で引用された最近の映画、『君の名は。』と『シン・ゴジラ』について、前者は見たことがあるという回答があったのに対して、後者はゼロであったのは興味深い。

カフェの後半では、各地での18歳の投票率が高いことを前提として、山陰地方での市長選



挙を想定して、あなたが「多文化共生推進プラン」をめぐる争う候補者の選挙対策責任者だったら、どんな政策を考えるか、という課題が示され、4人ずつ3つのグループに分かれてプランを立てる、まさにアクティブラーニングが行われた。わずか15分足らずの短い時間だったにもかかわらず、他者の文化を学ぶためのインターンシップ、土地の年長者から外国人に方言を教える機会の提供、郷土料理の紹介など、さまざまなプランが提案された。

はじめはすこし緊張した様子であったが、小玉先生のわかりやすい説明と質疑が積み重なるうちに、打ち解けた雰囲気になっていくことがみてとれた。最後は生徒から教育に関する率直な意見も述べられて、およそ90分にわたるサイエンスカフェは終了した。なお、サイエンスカフェ終了後には、月刊の校内新聞を発行している新聞部のスタッフが小玉先生にインタビューを行っていた。いずれ記事になることだろう。

今回のサイエンスカフェは、関耕平先生（島根大学法文学部准教授）、飯野卓先生（出雲高校教諭）をはじめとする方々のご協力を得てはじめて開催することができた。ここに記して感謝申し上げたい。

小松久男

（東京外国語大学特別教授、第一部会員）

『学術の動向』平成29年11月号の予告

（平成29年11月1日発行予定）

特集1「ジェンダーと科学の新しい取り組み」（仮題）

執筆者	渡辺美代子	（科学技術振興機構副理事）
	井野瀬久美恵	（甲南大学文学部教授）
	Londa Schiebinger	（Stanford University）
	小川眞里子	（三重大学名誉教授）
	山極壽一	（京都大学総長）
	浅川智恵子	（日本IBM東京基礎研究所フェロー）
	藤井良一	（情報・システム研究機構長）
	伊藤公雄	（京都産業大学現代社会学部客員教授）
	荒木夏実	（森美術館キュレーター）
	伊藤香純	（名古屋大学准教授）
	Kinlay Tshering	（Ministry of Agriculture & Forests in Bhutan）
	石川幹子	（中央大学理工学部人間総合理工学科教授）

特集2「初等中等教育における英語教育の課題と可能性」（仮題）

執筆者	林 徹	（東京大学大学院人文社会系研究科教授）
	金山富美	（島根大学法文学部教授）
	大津由紀雄	（明海大学副学長）
	鳥飼玖美子	（立教大学名誉教授）
	伊藤たかね	（東京大学大学院総合文化研究科教授）
	圓入由美	（文部科学省初等中等教育局）
	伊藤摂子	（東洋大学文学部助教）